

## 【論文】

### 青年世代に見る人間関係希薄化の問題

#### —— 秋葉原事件を事例とする考察

横井 修一 (岩手大学名誉教授)

#### 0. 本稿における問題関心と視点——秋葉原事件の社会的な意味

2008年6月8日午後、日曜の歩行者天国で賑わう秋葉原の交差点で、26歳の青年が7人死亡10人重傷という無差別殺傷事件を起こした。この秋葉原事件は人々に大きな衝撃を与え、直後からマスコミの集中報道が続き、事件をめぐって数多くの論評がなされたが<sup>(註1)</sup>、報道・論評において注目されたのは無差別大量殺傷という事件の凶悪さよりもむしろ、犯人Kの犯行に至るプロセス・背景である。

「無差別殺傷事件」とは、犯人と特定の関係性がない人々が殺害される事件であるが、社会的に衝撃を与えるのはその「凶悪」性ではなく犯行が常識では理解できないというその不条理性であり、それ故にその社会的な背景要因が注目されるのである<sup>(註2)</sup>。

秋葉原事件が社会的にも注目される理由は、この事件が「<現在>の全体を圧縮して代表」(大澤真幸)<sup>(註3)</sup>しており、事件は「戦後日本に何回かあった大きな転換点の一つ」(見田宗介)<sup>(註4)</sup>と見られるからである。この事件は現代日本社会、とりわけ青年世代が直面する人間関係の希薄化問題<sup>(註5)</sup>を考察する<範例><sup>(註6)</sup>となる。

この事件は、①Kの犯行までの生活体験に現代青年の人間関係の問題性が典型的に表出されていて世代論的に論じるのに妥当な<範例>であるとともに、②反響の大きかった事件なので事例として考察するための情報が多く、③社会的な関心が大きいので読者に分かりやすい事例ともなる点でも<範例><sup>(註7)</sup>に適している。

本稿の課題は人間関係希薄化問題の検討であり、犯行要因の究明自体を課題としているのではないが、考察の<範例>に適していると言えるためには、犯人Kの人間関係の希薄さが犯行要因として重要であったことが前提となる。そこで、はじめに犯行要因をめぐる議論を検討し、その後でKのケースを<範例>として青年世代の人間関係の問題点を明らかにしてゆく。

\*以下、ネットの書き込み、および裁判の報道については、本稿末尾の「資料」に掲げた新聞等によるもので一々典拠を示さない。日付だけを示した掲示板の書き込みからの引用は、インターネット(<閩ペディア:「秋葉原事件」> <http://www.kotono8.com/wiki/>)からのものである。

#### 1. 「犯行要因」をめぐる議論の検討

事件直後からマスコミ報道を別にしても多数の論評がなされたが<sup>(註8)</sup>、Kは逮捕後素直に自供しただけでなくネット掲示板に膨大な書き込みを残しているのも、議論は専ら犯行動機と背後の要因に関するものである。そうした犯行要因をめぐる議論を4つのタイプに整理し、人間関係要因説以外の3つのタイプは犯行要因説としては妥当でないことを確認し

ておく。

### (1) 事件をめぐる議論の4つのタイプ

犯行自体を論じたものも含む犯行について言及された論稿の主なものを取り上げて犯行要因に関する諸説を概観してみると、4つのタイプが区別できるように思われる。

#### <犯行要因に関する諸説の4タイプ>

- ①派遣労働要因説：格差を生む社会（構造）への反発や労働条件など派遣労働者の生活の不安定さ、犯行直前の解雇予告に対する反発、そして「いくら努力しても何も変わらない」、「すべてをリセットしたい」という「希望」の欠落が犯行の引き金になった。事件は今日の「派遣労働」問題が引き起こしたものである。
- ②個人的パーソナリティ要因説：母親（家族の躰）と受験教育への反発、そして進学高校での「落ちこぼれ」とそれによる劣等感（理想的自己のイメージとのギャップ）が人格形成に影響し、犯行時に重篤化したパーソナリティ障害が犯行を生んだ。
- ③世代要因説：2008年は「無差別殺傷事件」が続発したが、その犯人である若者たちのパーソナリティには現代の社会的状況に影響された世代的な特徴が見出される。秋葉原事件でも、そうした世代的なパーソナリティが犯行要因になっている。
- ④人間関係要因説：日常生活において人間関係が希薄で孤独であったことがネットへの過大な依存となり、そのネットでも無視されて孤立したことが犯行につながった。

### (2) 派遣労働要因説の限界

派遣労働要因説は、派遣労働に絶望した青年による犯行はまさに派遣労働問題が生み出したものであるという見方で、早い段階では事件をめぐる議論の主流となった<sup>(註9)</sup>。

この事件に対する若者層の反応も大きく、インターネット上の書き込み数ではオウム真理教事件以降、最大であったが、その多くは「Kは今日の派遣労働問題の犠牲者であり、結果として派遣労働の矛盾を暴きだした“功労者”である」というものであった<sup>(註10)</sup>。派遣労働要因説によれば、Kは——その罪はともかくとして——社会的矛盾による「犠牲者」である。そして強硬な論者は、派遣労働問題を無視・軽視した事件への言及は、「社会的矛盾を犠牲となった青年（個人）へと還元する体制擁護の主張」であると反対者を罵倒している<sup>(註11)</sup>。

しかしながら、このような見方はある種の「基底還元論」で、社会科学的な認識としては誤りである。派遣労働者であったKの、生活における将来不安・仕事のやり甲斐のなさ、職場内の人間関係の希薄さ等々は、派遣労働という就労条件によるものであり、それは確かに今日の日本社会で最大の社会問題である。しかし、そうした基底要因自体を犯行の主要因であるとすると、派遣労働を生んだものとしての新自由主義、その新自由主義をもたらした経済のグローバリゼーション、さらにそれらを主導するアメリカの覇権等々がすべて基底要因となるから、論理的には「新自由主義の打破」等々なしにはKのような犯罪の防止はできないことになる。この事件の社会的衝撃は大きく事件直後の国会でも派遣労働の規制が論議されたが、犯人Kの生活に派遣労働問題の深刻さを認めることと、それを犯行の主要因と見る解釈は別次元のことである<sup>(註12)</sup>。「自分がなぜ犯行に至ったか解明に役立つことをしたい」というK自身が公判の供述において、派遣労働は自己の犯行の動機や要因でない<sup>(註13)</sup>と明言しており、それが何よりも派遣労働要因説の否定となる。

### (3) 個人的パーソナリティ要因説の限界

精神医学者・犯罪心理学者を中心に、Kのパーソナリティの異常さ・人格の病理性を犯行の主要因とする見方がある。「容貌コンプレックス」あるいは「境界性人格障害」（友人の無さ・孤立や突然の激昂など対人関係能力の弱さ等々）こそが、人生に絶望して殺傷事件を犯した動機とされる。そして、県下の名門進学高校での優等生からの転落によるコンプレックス<sup>(註14)</sup>、異常なほど厳しい母親による過度の勉学指導<sup>(註15)</sup>および家庭における人格形成の失敗が、犯行時のパーソナリティ異常の原因とされている<sup>(註16)</sup>。

しかし、Kの掲示板の書き込み内容をそのまま根拠とする議論には問題がある。「容貌コンプレックス」については、裁判過程でK自身が「ウケを狙った発言」であり、「ネットの書き込みをそのまま受け取っては困る」とも述べている。また、「孤立・孤独」に関してもKには職場等での適応力もあり（本人も自負している）、友人もいて日常的な交友もあったことが逮捕後のリサーチで明らかになっており<sup>(註17)</sup>、少なくともパーソナリティ・レベルでの異常性を要因とみるのは妥当ではない。

また、「躰・家庭教育」などを犯行の主要因とする見解にも疑問がある<sup>(註18)</sup>。人格形成時の「過去」が現在の犯行に至ったという、暗黙裏に直線的な因果関係を前提している見方は、およそ社会科学の基本的な思考枠組を無視するものである。ある時点の個人が「思う」ことには、過去・現在のあらゆる経験——すべてが意識化されることはない——が関係しているし、「行為」にはその「決意・思い」などの「主観」だけでなく「行為の環境」の諸要因も関与している<sup>(註19)</sup>。

そうした社会科学的な常識に照らして考えれば、家庭における人格形成等の過去の事象を、それが要因の一つに数えられるのは当然としても、犯行の主要因と断定するのは非科学的である。もしそれが決定的な要因であるとすれば、論理的には家庭における人格形成に問題があった青少年はすべてなんらかの犯行に至るということになる。

以上のように、①派遣労働要因説と②個人的パーソナリティ要因説は、それ自体は間違った解釈ではないが、Kの犯行要因の説明としては不十分なのである。

## 2. 世代論的な観点——<ロスジェネ世代>の典型としてのK

第3のタイプである世代要因説は、Kの意識に見られる世代的な特徴が犯行要因であるとする見方である。Kが現代の若者世代の典型であるということを本稿の前提としているので<sup>(註20)</sup>、まずそのことを確認した上で世代要因説の限界を指摘することにしたい。

### (1) 「ごく普通の若者」による凶悪犯罪——逮捕後のKの素顔

「凶悪犯罪」を犯したKは逮捕直後からは「まったく普通の青年」で、犯行の凶悪さとのあまりのギャップに啞然とさせられる。犯行直後に路上で逮捕されたKは、まるで憑物が落ちたかのように茫然としていたが、逮捕1時間半後の取り調べでは「凶悪犯」のイメージのかけらもない、ごく小心な青年の姿であった。

「持ち物の確認と人定にも素直に応じた。そのときから鼻水がたれるにまかせて泣きじゃくっていた。担当刑事が死亡者の名前と死亡時刻を告げると、また泣き出した」<sup>(註21)</sup>。

これまでの確信犯な凶悪犯とは、まったく違った態度である。最も強硬であった宅間死刑囚（2001年の大阪・池田小学校児童殺傷事件）の場合は、「まったく後悔していない」「できればもっと殺したかった」とまったく反省の言葉がなく、「さっさと死刑にせよ」と裁判を起す始末であった。精神的な異常を疑われる者もあるが、奈良少女殺害事件の犯人などの凶悪犯で逮捕直後に反省した例はこれまでにないので、あまりにもKが「普通」であることが目立つ。

さらに、公判の場では、「今後このような事件が起こらぬように、自分を振り返って犯行に至る経緯（要因）を明らかにすることが自分の責任」と述べて取り調べに素直に感じており、被害者への長文のお詫びの手紙も出している。

「被害者の方、ご遺族の方には申し訳なく思っている。裁判は償いの意味もあるし、犯人として最低限やるべきこと。なぜ事件を起こしたのか、真相を明らかにすべく、話せることをすべて話したい。私が起こした事件と同じような事件が将来起こらないよう参考になることを話ができればいい。…」（＜Kの供述要旨＞：『岩手日報』10-07-28）  
「…彼はこの事件後、なぜこの事件を起こしたのかを必死に考えている。…」（＜弁護側冒頭陳述要旨＞：『岩手日報』10-01-29）

「普通の青年」が「冷酷に凶悪な」犯行を行ない、犯行直後にあっさりと「申し訳ない」と口にする「普通の青年」に復帰してしまう。世間に衝撃を与えたのは、犯行後にはあまりにも「まっとうな」青年が周到に準備して凶悪な犯行を行なっているという事実であり、まさにこの点に今日の社会の問題がある<sup>(註22)</sup>。

## （2）Kの犯行の特質——犯行準備における目的合理性

犯行時のことをKは「よく覚えていない」と述べ、被害者・家族を始め公判を見守る人々の気持ちを逆なでした。しかし、犯行時には「我を忘れた状態」で普段の当人の言動とは断絶していることはよくあるし、凶行の技術的手段が高度化している先進国社会では一人でも短時間に「凶悪・残虐」な犯行が可能であり<sup>(註23)</sup>、短時間の言わば忘我の犯行の結果だけで「凶悪・残虐」とするのは妥当ではない<sup>(註24)</sup>。

Kの犯行の特異な点は、犯行の意図と計画が考え抜かれていながらその凶行の結果についてはほとんど考慮していないことである<sup>(註25)</sup>。あくまで、自己の想念としての目標（「世間を騒がす」「ネット仲間に反省させる」という犯行の影響）だけが直線的に思われているだけで、被害者のことなど犯行の多面的波及的な影響は思い浮かびもしない。Kの犯行計画の合理性と過度の利己主義・独善性——こうした点には青年世代中心に現代社会に見られるようになった病理性——自分に無関係な他者に対する無関心・冷淡さ——が表れているように思われる。

## （3）世代要因説の限界

世代論的に見るとKは「ロスジェネ世代」である。「ロスジェネ世代」とは、「就職氷河期」（1993-2005年）に卒業=就職を経験した世代（2011年現在24,5～37,8歳）で、希望する職業に就けなかった（職業機会の「ロスト」）ために非正規雇用（広義のフリーター）になった割合が前後の世代より多く、「フリーターから抜け出せない」人が少なくな

い青年層を指す。社会化過程におけるそうした経済社会的な環境条件は、世代に特徴的な社会意識と行動様式（ロスジェネ世代）を形成する。

そしてKの意識・パーソナリティには、そうした「世代的」とみなされる「まじめ、孤独、衝動的、他者への無関心」などの特徴が見出される<sup>(註26)</sup>。Kは公判過程で、「今回の事件も過去の失敗もそうだが、もっと先のことを見通すべきだった」（『読売新聞』10-08-04）と悔い謝罪しているのであるが、それは単に個人的な欠点としての「思慮不足、短絡衝動的、想像力不足」ということではなく、そこには世代的かつ現代的な特徴であるように思われる<sup>(註27)</sup>。

世代要因説は、派遣労働要因説とは違い、労働・生活構造よりもそれらによって影響をうける「意識・心理」を犯行要因として重視する。また、パーソナリティ要因説が「個人」の経歴とそれによる人格の特異性を重視するのに対して、社会の一員としての個人を重視する見方である。こうした区別は相対的で、「意識・心理」は「生活条件・社会構造」に規定されているし、いかなる人も同時代の社会的存在としての意識・行動様式の共通性がある。したがって、派遣労働者の生活に充実感や将来の希望を持たずに刹那的な消費志向に走りがちなロスジェネ世代としての社会意識がKに色濃く見出されるのも当然である。

しかし、Kの世代的な特徴を指摘するだけでは犯行を説明するには不十分である。それは前に述べた派遣労働説の基底還元論にも似て、全体社会レベルで適用されるべき理論（ロスジェネ世代論）を特定の個人の行為の説明に適用することになる。

また、世代的な意識が犯行動機だとすると、世代意識を変えないかぎりKのような犯行を防止するのは不可能ということになりかねない。世代要因説は犯行の背景を説明しているが、犯行の主要因、すなわち「なぜ犯行に及んだか」——逆に言えば「どうすれば犯行に至らずに済んだか」——の説明にはならない。派遣労働要因説の論者が非難・罵倒するのは違った意味で、犯行動機についての世代要因説的な解釈には限界があると言わざるをえない。

### 3. 人間関係要因説——Kにおける人間関係

世代要因説では「世代」のどのような特質が直接犯行につながったかについての説明が不十分であるが、本稿で重視する人間関係要因説は若者世代の人間関係の特質をKの犯行要因として重視する見方である。

#### (1) Kの孤独とネット依存

Kがネットの掲示板に——特に事件直前に——異常な頻度で書き込んでいたこと、そして、終始「友達のなさ」「他者の反応がない（無視される）こと」など「孤独な私」をアピールしていた。そして、裁判に至る過程でK自身も「なぜこれほどネットに依存したのか」と自問し、その過度の依存を犯行の一因としている<sup>(註28)</sup>。

「掲示板」への膨大な書き込み<sup>(註29)</sup>とその内容から、Kのネット以外の人間関係の希薄さ（孤立・孤独）を読み取り、それを犯行の要因に挙げる論者は多い<sup>(註30)</sup>。特にそのことを重視する見方、すなわちKは孤独なためネットに過度に依存し、そのネットで反応がなくな

った時、犯行を決意したのであり、「交流できる人との出会い」があれば犯行に至らなかつたであろう——という見方が人間関係要因説である<sup>(註31)</sup>。そして、Kの次のような書き込みは、彼の「孤独」が犯行要因であることを自認しているものである<sup>(註32)</sup>。

「ちょっとしたきっかけで犯罪者になったり、犯罪を思いとどまったり／やっぱり人って大事だと思う」 (06/04 00:02)

「人と関わりすぎると怨恨で殺すし、孤独だと無差別に殺すし／難しいね」 (06/04 00:04)

また彼は公判でも、「現実で本音でつきあえる人はいなかった」し、「掲示板は私にとっての居場所。家族同然」と述べている<sup>(註33)</sup>。そうしたK自身の言葉からは、ネットのつながりしかない「孤独な青年」というイメージになるが<sup>(註34)</sup>、それには大いに疑問の余地がある。犯行直前の半年あまり (07年11月～08年6月) は確かにそうしたイメージに近いが、その段階でも職場に親しい友人 (後輩) もおり、職場仲間との交友もあったのである<sup>(註35)</sup>。

## (2) Kにおける「彼女」と「友達」

それでは、Kの人間関係はどのようなものであったのか。人間関係要因説が示唆するように、Kの人間関係の希薄さがネット依存につながり、ネットにおける孤立から絶望して犯行に至ったのだろうか。Kが語っている彼の人間関係についての認識も犯行に至った経緯の説明も、当然のことながら主観的な偏向があり、分析が必要である。そこで、Kの人間関係を3つのレベルに分けて分析し、Kに「孤独」を意識させた背景——それが犯行要因ともなる——を考えてみたい。

第一のレベルは、「彼女」に象徴される「親密な関係性」である<sup>(註36)</sup>。次の言葉が典型的である。

「彼女がいない／それがすべての元凶」 (06/06 03:04)、「彼女がいれば、仕事を辞めることも、車を無くすことも、夜逃げすることも、携帯依存になることもなかった／希望がある奴には分かるまい」 (06/06 03:09)

彼のネットへの書き込みには、自分がモテないのはあくまで女性の側の意識 (高学歴・高収入志向) のためであるという主張を繰り返しており、「リア充」 (充足した生活をしている人) ——とくに恋愛関係にあるカップル——に対する攻撃的な感情を吐露している。

「ぶっちゃけね、後輩に彼女ができたみたい／その幸せ自慢を毎日されてる／いい奴なんだけど、自分の中のどす黒い感情が抑えられない／祝福してあげたい気持ちももちろんある／同じくらい殺意もある」 (06/04 00:41, 43)

「[車中から] 長良川超えた／堤防でいちゃついているカップル、流されて死ねばいいのに」 (06/06 10:37)

Kは何人もの女性に「彼女」になってくれるようにとアプローチしては失敗しており、それを悔しく思っていたことは十分推察されるが、中島のルポルタージュで詳細に伝えられているところでは、Kは女性との交際・アプローチにおいてもかなり独善的で<sup>(註37)</sup>、「モテない」のも当然のように思われる。

「恋人さえいれば」「彼（彼女）がいないなんて」等々は、現代の若者世代に目立つ「恋愛幻想」（「恋愛＝幸福」）であるが、Kもまた「恋人もいない不幸」を嘆き人生の挫折感を倍加させた。

第二は「友達」で、Kは恋人不在と同じように友人不在を嘆く書き込みを繰り返した。

「みんな死んでしまえ。上辺だけの友達。言葉だけの友達。実際は他人。みんな敵。友達が欲しい。本当の友達が欲しい。」（05/31）  
「携帯ごしても友達がいるはずだったのに・・・みんな俺を避けている」（06/03 18:54, 18:55）

彼の「友人」には3つのカテゴリーがある。①高校時代・故郷青森の友人、②職場の同僚、③ネットのつながり——である。Kは犯行直前に「本当の友達が欲しい」と繰り返しており、「絶対的な孤独・底のない孤独」（芹沢俊介）とも言われたが<sup>(註38)</sup>、ネットの書き込みや公判の供述から受ける印象とは異なり、若者の友人関係としてはむしろ親密と言えるような友人（①と②）がおり、断絶は③ネット上の「友達」の方であった<sup>(註39)</sup>。

### 1) 高校と故郷の友人

Kには、友人関係もそれなりにあった<sup>(註40)</sup>。高校の友人仲間とは卒業後もつながりがあり、離職時にいきなり押しかけてアパートに滞在させてもらったり、仕事の心配をしてもらったりと、地方都市の高校のよさであろうが、仲間とは「厚い」と言えるつながりが犯行直前まであった<sup>(註41)</sup>。

こうした交友が、犯行前の半年前に断たれることになったのも、その友人たちに対する配慮からメールすら絶ったのも、彼の浅慮による青森出奔のせいであった。それは、「ネット上の知り合いを訪ねて行く」という企画のために会社に願出た休暇が拒否されて、退社・家賃滞納・父の車の持ち出し等々の——彼も自認する——不義理を重ねたもので、そうした出奔によって友人との交友が断たれたのである<sup>(註42)</sup>。

彼がそれほどまでに企画実行にこだわったのは、ネットで知っただけの女性に交際を申し込む——彼は恋人関係を望んでいた——という目的があったからである。そうした独善的な思い付きは当然のごとく失敗し、それなりに落ち着きつつあった正規職の生活条件も——結果として故郷の友人づきあいも——失った。Kは失意のまま青森を離れ、新たな地で派遣労働者となり「友達がいない」状態の中で自暴自棄になって行った<sup>(註43)</sup>。

青森出奔はKの独善的で一面的な思考の結果で、彼はその行為（企画とそのための出奔）が彼の生活と人生にどのような影響を及ぼすかについて恐らく一顧だにしていなかった。当時親しくしていた——Kが唯一心を開くことがあったという——職場の先輩の忠告すら聞く耳を持たなかった<sup>(註44)</sup>。こうした親しい人（友人・親）にも内面を明さず、他者の意見を聞こうとしないのは、若者世代だけでなく今日目立ちつつある風潮といえるであろう。

### 2) 職場の同僚

Kは短大卒業後から犯行までの5年ほど間に4回転職しているが、職場における人間関係は悪いものではなく、最後となった職場でも数人の仲間と遊んだり秋葉原見物に出かけたりするなどの交友があったし、仕事に関するトラブルを別にするとそれまでも職場の人

間関係で悩んだこともない<sup>(註45)</sup>。

しかし、彼は高校の友人に対するのと同様、職場の仲間には悩みなど内面を明すような付き合いをしないし、尋ねられてもネットのハンドルネームを明かそうとはしなかった<sup>(註46)</sup>。関係が切り捨て可能なネット仲間ならば直接会った時に悩みを打ち明けたこともあるが、持続する関係の現実の仲間には内面を見せたくなかったのであろう。

彼の人間関係を理解する上で、「リアルな」交友とネットのつながりは表裏の関係にあるので、次のネットのつながりと併せて分析したい。

### 3) ネットのつながり (掲示板)

犯行要因をめぐる議論では、公判における論告・判決も含めて——K自身の供述でも——挙げられている「ネット依存」が中心的な問題となっている。

「事件の原因は三つある。まず私のものの考え方、掲示板での嫌がらせ、最後の一つは掲示板だけに依存した私の生活の在り方です」(『読売新聞』2010-08-04)

故郷青森の友人などのつながりを失った犯行直前のKには、「現実でも親しい人がいるが、掲示板の方がより親しく、重要に感じ」、「私にとっての居場所」であったと述べている<sup>(註47)</sup>。しかし、派遣労働の空疎感と孤独感などの代償としてネットのつながりがあった——という見方は、K本人の供述があっても疑問の余地がある。

少なくとも犯行前1年あまりの期間におけるKのネットのつながりには、4つの側面(機能)があったように思われる。すなわち、①「恋人募集」、②自己顕示<sup>(註48)</sup>、③「居場所」、④鬱憤ばらし——の4つである。

④「鬱憤ばらし」は、残された掲示板の記録を見ると、読み手を期待することもなく、心象を思い浮かぶまま次々と異常な頻度で書き込んでいるもので、恐らく半ば異常心理になっていた犯行直前の一時期の機能でしかなく、③「居場所」としてのつながりが失われた状態といえよう。

③「居場所」は、Kの供述では「何より重要」であるが、それは主観的な願望でしかなかったように思われる。彼はネットのつながりを長く続く交流として楽しもうとしたことはない。彼がネットに書き込むのは、専らネット上で注目されること、センスのある人として評価されることを狙っているだけで、そうした評価が得られないと別のスレッドや別のグループに切り替えている。ウケ狙いが高じて過激な書き込みをしてはネット仲間が去ってしまうことが繰り返された<sup>(註49)</sup>。つまり、彼にとってのネットのつながりは、そうした②「自己顕示」のためであり、③「居場所」も自己顕示を満足させてくれる限りでのものであったように思われる。

Kは仕事において運転技能や職務への献身を評価されると喜び、認められない時に反発して退職したりと、「自尊」に敏感である。恐らく、派遣労働の仕事では手応えを見出し難いという生活条件の中で、ネットにおける自己顕示要求は、四大卒でないことを卑下するKのアイデンティティ確保の意味もあったのであろう。そうであれば、ネットがそうしたKの要求を充さなくなった時、彼は否応なしに孤独と挫折・人生の敗北感を募らせたことであろう。



さらに、Kのネットのつながりで目立つことは、女性に対する反応が常に自分と親密になってくれることを求めており、目指す女性に「彼」がいると分ったり女性が彼の書き込みに同調しないと分かれば、やりとりをやめてしまうことである<sup>(註50)</sup>。青森出奔の原因となったネット仲間との会合企画も目当ての女性に会って交際を申し込むのが目的で、断わられて失意に沈み自殺まで考えるという結末に終わった<sup>(註51)</sup>。そうした独善性と「恋愛幻想」が①「恋人募集」の基になっている。

### (3) <つながり>の意識

Kの人間関係の第三のレベルは、不特定で一時的な個人（客・店員・一メンバー等）としての関わり（つながり）である<sup>(註52)</sup>。

「店員さん、いい人だった」「人間と話すのっていいね」「タクシーのおっちゃんともお話をした」  
(06/06 14:39;14:42)

この第三のレベルでの関係性については、その裏返しの形として、他者との単なる一時的関係（猫との接触はその象徴）すらないことを嘆くKの書き込みもある。

「隣の椅子が開いているのに座らなかった女の人が、2つ隣が開いたら座った／さすが、嫌われ者の俺だ」「駅に猫がいた／無視された／俺だけ」(06/03 16:56)  
「こうやってイライラしているから猫も寄ってこなかったんだろうか」(06/04 01:05)

さらに、一時的関係であっても親身に接した人の厚情に対しては、素直に応える感受性もあった。ネット仲間との会合企画の結果に失意して東京に行き、自殺を考えて約半月も駐車し続けた時に、駐車場の管理人が駐車料金請求を保留——管理人は返済を期待してはいなかったであろう——してくれたことに、Kはその信頼に「何としても応えない」と思い、失意から立ち直ってその返済を一つの目標に働くことを決意した。その際事情を聞かれた警察官の諭し（「生きていれば辛いこともあるが、楽しいことは必ずある。君はがんばりすぎだから、肩の力を抜いた方がいい」）に、Kは泣いたという<sup>(註53)</sup>。

自分と異質と思う人々（「リア充」「勝ち組」）に対しては「皆死んでしまえ」と敵対視するKの反面には、こうした一時的な<つながり>——上述の場合は一時的でも「深さ」がある——に心を動かされるKには、人間同士の<つながり>に対する十分な感受性があった。しかし、それは孤独に追い込まれた窮状ではじめて受動的消極的に感じたことであって、日常場面におけるつながりを大事にしようとは思わなかったし、そうしたつながりが彼の深い孤独を癒すことはなかった。

## 4. 人間関係の希薄さ——秋葉原事件から現代社会の問題を考える

### (1) Kの人間関係についての意識

Kはネットの掲示板に執着したが、それは「2ちゃんねる」と「距離感」が違うとして、次のように述べている。

「私が使っていたのは特定の少数の人のですが、2ちゃんねるは不特定多数のコミュニティです。私

が使っていたのは高校のクラスのようなもので、2ちゃんねるは大学のようなものです。高校のクラスだとお互いの顔を知っていますが、大学だと知っている人は少ないし、ほとんどがほとんどがです。」（中島pp. 95-96）

こうした発言からは、Kが親密な人間関係を求めている、それが得られないが故にネットにつながりを求めたという見方が生まれる。しかし、K本人はネットのつながりと現実の人間関係を区別していた<sup>(註54)</sup>。

そもそもネットにおける2ちゃんねるのような「名無し」同士の刹那的会話をKが好まなかったのは、前節で述べたように、彼のネットのつながりは「恋人募集」「自己顕示」が主なので自分が「名無し」であっては意味がなく、また彼は書き込みを読む相手が不特定であることは好まなかったからである。しかし、「リアルな」仲間にも求めない持続的なつながりがネットでは重要だったという訳ではない。ネットであれ現実であれ、その関係においてはKは自己の限定された一面で関わるだけであった<sup>(註55)</sup>。

「相手に対して気を使う、私に対しても気を使うことで、表面的には親しいが、気を使う、使われるのが建前社会だと思います。」

「今考えれば、相手によって接する距離感が違うが、私の極端な性格で、すべての人に建前の距離をとったのだろうと思います。」（第17回公判）

こうした人間関係は必ずしもKだけのことではない。現代日本社会では、日常生活における「親しい」人間関係ですら心を明すことが少なく、悩みなどをむしろ一時的関係の相手に相談することが多くなっているなど、人間関係の希薄さが生む孤独が若者世代を中心に浸透しているように思われる<sup>(註56)</sup>。この点でも、Kのケースは今日の日本の問題を考えるための重要な事例である。

Kの人間関係が希薄になったのはなぜなのか。Kはネットの関係のみならず現実の関係でも、嫌になったり都合が悪くなったりするとあっさり関係を断ち、親しくした人でも「ぜひまた会いたい」と思ったこともなく、関係持続の志向はもたなかった<sup>(註57)</sup>。内面などプライバシーは打ち明けられない表面的な付き合いを好んだKは、一方では必要なら人間関係は「うまくやれる」と思っていた。つまり、Kは、人間関係をその状況に合わせて作る、演技的で操作可能なものと思っていたのである<sup>(註58)</sup>。

また、彼は転職などについても仲間・友人の意見や批判を聴こうとはしなかった。すべて自分が判断し、周囲の人間は彼の行動の結果を知るだけであった<sup>(註59)</sup>。自分の考えや思いを口にして周囲の人の話を聞いたり反応を見ることは、日常で行なわれる自己の相対化・客観化であり、利己的であったり独善的であったりする思考も緩和される。しかし、そうした相手と意見を言い合うような付き合い方は、ネット上であっても、Kにはなじまないことであった。

身近な人の意見を聞くという態度は今日少なくなったし、逆に親身に相手に意見を言うことも控えるようになっていく。また相手のことを無視して一方的に主張する傾向も、今日の日本社会ではKのような青年世代に限らないのである<sup>(註60)</sup>。

さらに、ある時は浅かったり不仲でも長い付き合いを重ねて深く親密になるという関係のあり方とその価値がKには理解できなかったように思われる。公判で彼は自らの人間関係観の誤りを反省し、次のように述べている。

「[弁護人の「物理的距離はあっても友人ではないのですか。」という質問に] 一般的にはそう理解できるかも知れませんが、私にとっては一緒にいる時間が親しさの基準であり、一緒にいた人に会う頻度が月一度や2～3ヶ月に一度となると他人同然となります。」(第18回公判)

Kの事例に典型的に見られる人間関係の希薄化は、秋葉原事件を生み出した背景であるだけでなく、今日の日本社会の重要な課題なのである。見田宗介は、秋葉原事件を「人と人の関係の中で、愛情や関心であれ、憎しみや干渉にしても、他人との間に交わされる関心」が薄くなりすぎているという世代的な特徴——同時に現代日本社会の特徴——を表出した典型的なケースとしている<sup>(註61)</sup>。そして、見田の次のような言葉は、そうした問題関心を持つ者に希望を与える。

「出口はあるか? ……人を殺したり、自分を傷つけたりするのは別の仕方、生きるリアリティを充実する仕方を青年たちが見つめることができれば、もう一つ新しい時代が開かれると思います。」(見田宗介、「空気」の薄い時代『朝日新聞』2008-12-31)

## (2) 必要な変化とその可能性—— つながり希薄化させないために

本稿では、特にKの人間関係に焦点をあて、若者世代のみならず今日の日本社会で問題となっていることを考察してきたが、最後にKのケースを念頭において、人間関係に関わることで実際に個人的レベルでも変えることができる——社会全体の構造的な変革を待たなくとも可能な——ことを挙げておきたい。

### 1) 「恋愛幻想」の克服

Kが犯行に至った「孤独」は青森出奔の結果であるが、出奔原因となったのは彼なりの「婚活」である。両親の離婚による孤独感があったとはいえ「恋人さえいれば」という「恋愛幻想」が正規職を捨てさせた。カップルとして恋愛し結婚生活するには、交友を通して互いに相手を理解しなければならないのに、そうした過程を飛ばしても「恋人=幸福」という希望がかなうと思うところにも幻想性がある。(「婚活」ブームは罪深い。)

そうした恋愛幻想から解放されるためにも、日常の様々な場で若者たちが婚活を直接意識しないで交流できる機会が必要である。若者たちも「彼・彼女あり」をステータスとしたり、「恋人なし=不幸」<sup>(註62)</sup>としたりする「恋愛幻想」を克服する必要がある。

### 2) 交友と協働の重視

状況に合わせて「距離」をもって振舞う一面的な関係というのがKの人間関係と意識であったが<sup>(註63)</sup>、これは状況に合わせて「キャラ」を演じ分けるという若者世代に一般的な——今や日本社会では普通の——意識であろう。こうした人間関係の在り方は、社会経済的な構造の影響を受けたものであり克服するのは容易ではないが、少なくとも交友経験を多くすることで人間関係の意識とスキルとを養うことは個人的レベルでも可能である。

その対応に必要なのは「恋愛幻想」の克服と同じく交友機会を多くすることで、交友それ自体を目的とするのではなくに交友を伴う活動にすること(目的達成だけの活動にしないこと)が重要である。最も望ましいのは、地域社会や学校で参加者ができるだけ自発的に共同作業できるような活動形態(協働の場)が作られることである。町内会レベルで

の、子どもから高齢者まで世代を超えて参加する活動（伝統芸能や祭りなどの催し）も岩手県では多くの例がある<sup>(註64)</sup>。学学校教育では、指導要領改訂で否定されたが、「ゆとり学習」での「総合学習」は生徒に協働の機会となる。学校のサークル活動や行事は、受験教育で圧迫されがちだが、生徒の人間関係能力養成にも重視すべきである。

### 3) 職場における交流の重視

現在の経済・労働構造では、労働（作業）の現場で交流も協働すること自体は困難であることが多いが、離職防止やモラル向上目的の職場内交流の重視は人間の「豊かさ」重視の点でも好ましいことであるし、最近多くの企業で実践する例が増えている<sup>(註65)</sup>。

### 4) ネットのつながりの限界について認識すること

少なくとも犯行前の1年あまりの期間に限れば、Kのネット利用は「現実の」人間関係を補完するものであったが、彼の独善性が招いたトラブル——犯行動機にも挙げられる——によって人間関係が断たれ、Kは孤独に陥って犯行に至った。それは彼がネットのつながりの限界を認識していなかったからである。

その限界とは、ネットのつながりはいつでも断絶する一面的な関係にすぎず「現実の」人間関係の代替にはなりえないし、ネットの関係だけでは現実の人間関係と人間関係能力が減ってゆくということである。ネットのもたらす可能性だけでなく、そうした限界についてもネット利用の前に知っておくよう青少年に啓発する必要があるであろう。

### 5) <つながり>の意味の認識

Kには、一時的な人々との関係（つながり）を「いいものだ」と思える感受性があったが、それを日常で積極的に大事にすることはなかった。確かにコンビニやファーストフード店などのアルバイト店員が主となるチェーン店では難しいので、犯行前に過ごした地域では困難であったかも知れえないが、彼が日常で「つながり」を大事にしようと思えばいろいろな機会があったのではないだろうか。少なくとも、それが家族・恋人・友人と言った「親密性」とは異なる形式ではあるが決して孤独ではない関係の在り方であることを彼は認識していなかった。

マニュアル通りの形式的な接遇でも接する側が無表情のままちょっとした会話を交えるかで違ってくるし、多少はなじみになった食堂などでは「つながり」を楽しむ可能性があり、それは職場の人間関係でも職務で接する人々の間でも可能な関わり方である。しかし、忙しさの中で行動目的のみを重視する振舞いが、そうした可能性を忘れさせるのである。

本稿では、秋葉原事件の犯人Kの生き方を範例として現代日本社会の問題の一端を考察してきたが<sup>(註66)</sup>、その人間関係にだけ焦点をあてたので取り上げないままの「問題」が残されている。若者に働かざるを感じさせない労働の在り方、欲望を抑えきれなくさせる消費主義——Kは車の購入による借金で離職したことがある——の影響、あるいは何よりも後に母親が後悔しK自身が絶えず挫折感につきまといられることになった学歴主義と受験教育主義の影響——ある意味では最も犯行要因に近い——などの問題もある。そして何よりもこの国の人間的な「豊かさ」を見失ったかのような社会体制の問題がある。

しかし、そうした問題を考慮しても人間関係をめぐる問題は大きな問題であり、その変革は現にいろいろな取り組みともなっているし、一人一人が自らの問題として考えるだけでなく、それぞれの持ち場で職務を通して影響を与える立場としても変革可能であることを強調しておきたい。

\* 秋葉原事件については講演や現代行動科学会での発表などの機会が何回かあり、この論文はその「まとめ」であるが、その最初のきっかけは福島大学行政社会科学部学生を対象とする「特別講義」(2008/10/24)であった。機会を与えて下さった福島大学の安田教授と熱心にコメントを書いてくれた聴講学生諸君に感謝する次第である。

## <注>

(注1) 末尾の文献リストを参照

(注2) そうした意味で、秋葉原事件は、幼女連続誘拐殺害事件(M=宮崎勤:1989)、オウム真理教事件(麻原彰晃:1995)、神戸酒鬼薔薇事件(A少年:1997)、池田小学校児童殺傷事件(T=宅間守:2001)などに続く事件、高度成長期(1955-1975)以降、社会や時代を論じるには無視できない「日本社会の問題が集約した事件」(岡田尊司,2009,p.12)である。

(注3) 「……直接には少数の人々がかかわっただけの特異な出来事が、その特異性を維持したまま、その出来事が属する<現在>の全体を圧縮して代表することがある。……この事件[秋葉原事件]もまた、おそらく、出来事以上の出来事、<現在>の全体[日本社会の全体的な現状]を写し取る出来事の一つになることだろう。」(大澤真幸(編)2008,「はじめに」)

(注4) 「後から見れば、今年が戦後日本に何回かあった大きな転換点の一つになっているのでは、と考えています。そんな時代の問題点を秋葉原の事件が鋭く表しています。」(見田宗介,「リアリティに飢える人々;空気の「濃い」時代から「薄い」時代に」(談話)『朝日新聞』2008-12-31)

(注5) 本稿で論じるのは、「人間関係」「交流」「コミュニケーション」「絆」「居場所」「社会的資本」等々として論じられてきたことに関わることである。

(注6) <範例>は、「社会学的な問題を具体的に考察するのに有効な(それを考察することによって深い知見が得られる)考察対象」の意味で用いる。

(注7) 社会学の研究がなんらかの形で人々の意識や行動の変化とその結果としての社会の変化を目指すとするれば、論じられたことが受け手(読者)に「よく分かる」ことは重要な要件であり、そうした意味でもこの事件は<範例>に適している。

(注8) 犯行要因や犯人像に関しては、事件発生後1年ほどであらかたの説が出揃った。出版物が短期間に輩出したのは、情報・資料が多かったことに加えて、出版商業主義が評論家のみならず「研究者」にも浸透したからであろう。

(注9) 「どうせ俺は社会的信用なしですよ」という派遣労働への不満がネットの書き込みにも繰り返されている。犯行直前(6月5日)に自分の作業着が「職場の嫌がらせで隠された」と怒りを爆発させたことは、検察側も論告で犯行要因の一つとしている。

(注10) 『週刊新潮』2008-6-26。例えば次のような書き込みが紹介されている。

「加藤容疑者は現代社会が生み出した最も悲惨な被害者だ。そう、彼によって殺された人間よりも……。 (中略) 若者は現代社会に、自分の将来に希望を見出だせないでいるのだ。(中略) これは社会に与えた警鐘である。やり方はどうあれ、彼が警笛を鳴らしたのだ」

「加藤は俺たちの十字架を背負って死刑台に上がる！」

「……オレは加藤のお陰で自信が付いた。今なら加藤まで行けないけどすごいことができると思う。

加藤ありがとう。勇気を与えてくれて感謝してる」(2ちゃんねるの書き込み;『週刊新潮』2008-6-26;中略は記事のまま)

(注11) 後藤和智,2008

(注12) 重松 清,「若者よ、殺人犯を英雄にするな!」(文春新書編集部,2008,p.187)および仲正昌樹,「アキバ事件をめぐる「マルクスもどきの嘘八百」を排す」(文春新書編集部,2008,pp.201-223)参照。

(注13) Kの公判冒頭での陳述(『岩手日報』10-01-29など)。ただし、本人自身が意識化していない意識・心理もあるから、本人自身が否定しても、不安定就労(生活不安)が犯行につながったという解釈も成り立たないわけではない。

- (注14) 中学校までは「秀才」であったが県内トップの進学校に入ってから後は「ずっとビリ」「高校出てから8年間、負けっ放しの人生」という自嘲を、Kは繰り返しネット掲示板へ書き込んだ。
- (注15) 母親は自ら作文などの宿題を仕上げるなど徹底的に「成績」にこだわり、勉強の妨げとなるとして異性交際どころか異性への関心自体をも禁じた(矢幡pp. 17-24)。こうした母親による家庭教育が犯行の背景にあることを、Kは公判過程でも「(犯行の)原因の一つ」と明言している。また、母親自身も「おまえたち(Kと弟)がこうなってしまった[生活面での破綻]のは自分のせいだ」と述べたという(弟の手記:『週刊現代』2008-6-28; 中島p. 85より)。
- (注16) 「思春期挫折症候群」(碓井pp. 30-31)や「妄想性パーソナリティ障害」などの可能性が示唆されている。「加藤容疑者は、元来ナルシズムとマゾヒズムの混合した複雑なパーソナリティの持ち主であった。だが、犯行直前になって、より深刻なパーソナリティ障害である妄想性パーソナリティ障害に重篤化した」(矢幡p. 41)
- (注17) 矢幡pp. 31-33
- (注18) ここで否定さるべきは、「嫉・家庭教育の重要性」「道徳教育の必要性」等々の直線的な因果関係にあるとする主張であって、嫉や家庭教育の重要性やその影響自体を否定するのではない。
- (注19) 個人の特別な(非日常的な)行動が単一の動機・要因に基づくことは例外的というべきである。「要因」は行為のシステムだけでも無数に近く、より複雑な動機や心理のシステムについても同様で、犯行が行なわれるに至る要因は無数にある。そして、偶然的なことよりは一般的なことを、犯行そのものに間接的なことよりも直接的なことを「要因」とするので、視点によって多様な要因が挙げられることになる。この事件に関して、中島と和田が同様の見解を示している。
- 「引き金」[犯行動機]が何であるかは、特に重要ではなかった。たとえ[公判においても犯行動機とされている]「なりすまし」や「ツナギ騒動」がなくても、別の出来事が起これば、それが「引き金」になった。／問題は「弾」[犯行要因]の部分だ。／しかし、「弾」の構成要素は単一のものではない。それは時間の経過と共に形成された複合的なものだった。どれか一つだけが決定的な要因ではなかった。」(中島p. 200)
- 「おそらくは、すべての要因が重なり合って、このような犯罪が起こったと考えるのが妥当なのだ。つまり、一つでも要因が重ならなかったら起こらなかったかもしれない。性格をもっと温和にすることや、あまり悲観的になり、すぎないこと、あるいは、本音を語れる友達をもつことで、この事件は十分に防げた可能性はある。」(和田秀樹p. 1)
- そうしたある意味、相対主義的な議論に対して、本稿ではどのような要因が犯行を防ぐことになるのかを示唆するという視点が重要であると考えている。それは犯人において特殊な(「異常な」)要因ではなく、世代的に共通する要因を考えることによって、犯罪阻止ということより、より豊に生きるための指針となることを考究したいと考える。
- (注20) 若者論は「若者非難」ではない。社会変化——特に文化・意識面の変化——が若者層が先導することは社会科学の常識であり、それが望ましくならぬ変化と見られる場合でも、若者に顕著な変化は「大人世代」にも共通する社会全体としての変化である。
- (注21) 高山文彦, 2008, 「臆病な殺人者」加藤智大と酒鬼薔薇聖斗『現代』2008-8; 文春新書編集部(編), pp. 166-167)
- (注22) Kに同世代者としての共通性を感じるという中島の指摘(中島p. 17)は、Kの事件の基底にある問題を示唆している。
- (注23) 個人が単独で数十人殺害ということも、犯行の高度の「技術的」手段——銃器・爆薬・毒物・自動車・鋭利強靱な刃物等々——が現代産業化社会にあっては容易に入手可能だからである。
- (注24) 「残虐・凶悪」事件というべきは、犯行が長期にわたった、コンクリート詰め(少女監禁)殺人事件、新潟少女誘拐監禁事件など、あるいは命乞いする被害者をなぶり殺しにした長良川殺人事件など、犯人たちが「考えながら」長時間の犯行を行なった事件である。
- (注25) 同じく世間の反響を狙った劇場型犯罪である大阪の小学校における無差別殺傷事件では、犯人宅間は「(被害児童の)親は不条理を感じるであろう」とか、「裁判で死刑になる」など事件後の反響についても予想していた。
- (注26) 香山リカは、若者世代は身近な人に過度に関心を払い「関係のない人」には無関心(p. 182)で、「想像力の欠如」(pp. 168-182)が「現在の若者の弱さと甘えを考える上での基本的問題」(p. 162)であると指摘している(香山リカ:2008)。「想像力の欠如」「共感性の欠如」(岡田2009)など、同様の見方が多い。
- (注27) 斎藤 環は若者世代の思考様式の特徴は、「むしゃくしゃしてやった、……今は反省している」が基調をなす「気分」であると指摘している(大澤真幸(編), 2008, pp. 37-43)。

- (注28) Kは掲示板の書き込みについて、「……書き込まれている文字の内容をそっくりそのまま考えていることと受け取られると困る。ネタは一言でいうと冗談。」と書き込み内容から犯行動機を解釈する議論に反論しつつ、「[そうした書き込みが]うけると返信があり、とてもうれしかった。一人じゃないと感じた。掲示板は私にとっての居場所。家族同然。現実でも親しい人がいるが、掲示板の方がより親しく、重要に感じていた。」と、自分の生活に不可欠なものであったことを告げている（<Kの供述要旨>：『岩手日報』10-07-28）
- (注29) 書き込みは5月中旬から事件（6月6日）まで3000件以上あると言われる（矢幡p.33）
- (注30) 片田珠美,2009、芹沢俊介,2008、赤木智弘,2009、岡田尊司,2009、重松 清,2008 など。なお、主要因とはしないまでも、Kの人間関係における孤立を、犯行要因について論じた論者のほとんどが指摘している。
- (注31) 特に中島の著書（2011）は、Kの人間関係に焦点を当て、Kの「内面は、情報化社会に生きながら他者との関わりを求める若者の縮図であり、叫びでもある」ことを示した点で（森 達也：書評『岩手日報』2011-4-17）、代表的な人間関係要因説である。
- (注32) そうしたKの認識を高く評価する意見さえある。「人が無差別殺傷行為に走ってしまう根本に「孤独」があることを指摘してみせた、その洞察力の深さに舌を巻く」（芹沢俊介p.27）。
- (注33) 『読売新聞』2010-07-28；中島pp.101-104。
- (注34) 中島（2011）以前に出された研究者の著作・論文等の考察は、大半がそうしたイメージを前提としたものである。例えば、碓井真史（p.245）、和田秀樹（p.4）、芹沢俊介（p.27）を参照。
- (注35) 中島pp.135-141。
- (注36) 家族・親族などの成育期から続く人間関係は、Kの場合はかなり特殊で、犯行直前の書き込みや公判では、両親に対する憎しみを公言しており、それは「個人的パーソナリティ要因説」の主要な理由とされてもいる。しかし、挫折感からの自殺未遂の後両親と和解的になった時期には、若者一般に見られる普通の——親との「距離」があり親は生活において必ずしも重要でない——関係のようにも見える（中島85-90）。そして彼が両親との親密性を特に求めていた様子はないので、ここではこの種の議論で「親密性」の中心とされる「家族関係」は敢えて考慮しない。
- (注37) ネットで知り合っただけの女性に恋人関係を期待し「彼がいた」というだけで挫折感を感じたり、あるいは、二度会っただけで恋愛相談をしたり、一夜を共にしてくれることを期待したり……と、その安易で独善的な態度は興味本位に若者雑誌で書き立てられる大都市の若者風俗そのものである。そうした「独善性」は若者に限らず、一度恋人関係にあって別れた（あるいは一方的な思い込みによる）“恋人”に執念をもち憎悪して残酷な殺害に至る事件が頻発する背景でもあろう。
- (注38) 芹沢は、犯行の直接的要因として孤独を挙げている点で人間関係要因説に近いが、Kの孤独は「母親不在」がもたらしたと見ている点で個人的パーソナリティ要因説でもある。芹沢によれば、Kの求める「彼女」は親密性要求の核心である「絶対の信頼の対象」を象徴しており、Kの不幸は「母親が受け手としての自分を差し出してくれなかった」ために「[成育期に必要な]体験の絶対的な欠如を抱え込んだまま生きざるを得なかった」ことであり、そのことが絶望を生み犯行に至った解釈される（芹沢2008,第1章「アキバハラ事件・A青年の底のない孤独」）。
- しかし、筆者はKの言う「彼女」には「親密な信頼できる関係性」の意味もあると考えるが、それ以上に「恋人なら自分を全面的に受容してくれる」という独善的な願望（恋愛幻想）が強く、個人的パーソナリティ要因説で解釈されるような意味はないと考える。K自身も公判では「実家を追い出され、強烈な孤独を感じ……手っとり早い（孤独を解消する）方法」と思ったことが、彼女が欲しいと思った理由であると述べている（第18回公判）。\*以下、公判における発言の引用は、<MNS産経ニュースの法廷ライブ・グループ「秋葉原17人殺傷事件」>による。
- (注39) 「孤独」と伝えられたKに友人・仲間などの人間関係があったということは、中島（2011）の詳細なルポではじめて明らかにされた事実である。中島も「意外なことに、加藤は現実世界に思いのはほか多くの友人がいた。[取材してみると]彼と仲のよかった友人が次々と現れた。地元の青森にも、仙台にも、職場にも。」（中島p.15）
- (注40) 中島pp.65-69,80-92。また、Kは公判の供述で「現実にも親しい人があった」と述べている（『読売新聞』2010-07-28）。
- (注41) 犯行当日の書き込みには、「全員一斉送信でメールをくれる/そのメンバーの中にまだ入っていることが少し嬉しかった」（06/08 01:05）とある。
- 犯行の1年前に初めて自殺を試みた時（2006年8月）も、Kは故郷青森で「友人たちに自殺であることを知って」おいてもらいたいとメールしていた（中島pp.82-84）。
- (注42) 「夜逃げしたので……私と……親しくすることで友人に迷惑がかかると思い、接触しませんでした

- た」(中島p.141)。ただし、それだけではなく、犯行に至る時期には絶望する中で「もうメールなどできない」という思いもあったかも知れない。
- (注43) 中島pp.116-128。その孤独感の深さは、芹沢(2008:第1章)がとりわけ深く分析している。
- (注44) 中島pp.114-116
- (注45) 中島pp.135-141,148
- (注46) 中島pp.104,137-138
- (注47) 『読売新聞』2010-07-28;中島p.14
- (注48) Kにとってネットは「自己承認欲求を充たす代替不可能な居場所」でもあった(中島p.148)。
- (注49) 中島pp.14-15,81,97-100
- (注50) 中島pp.128,142,152-158
- (注51) 中島pp.120-122
- (注52) <つながり>は、まったくの「不特定多数」の人どうしであっても、そこで出会っている限りでの交流の感覚である。「家族・友人」といった特定の永続的な関係性を前提としない——しばしば一時的な——関係性においてはただ「交流」だけがある。「人と人の中で、愛情や関心であれ、憎しみや干渉にしても、他人との間に交わされる関心」(見田宗介)と重なる(本稿4節(1)を参照)。G. ジンメル「社交性」論(横井:2009)に基づくが、ここでは意味の紹介だけに留めたい。
- (注53) 中島pp.128-129
- (注54) Kはネット上で名前を明すことを断った理由として、「別にネットを使って現実でやりとりする友達を求めていたわけではない…」と述べている。(第17回公判)
- (注55) 公判では、自らの人間関係の意識が誤っていたと発言している。「掲示板にのめりこんでいたには執着していましたが、いまになって考えてみると現実の方が大切な部分がありました。居場所もあったようにみえて後悔しています。」(第17回公判)
- (注56) 「彼[K]の残した膨大な「孤独」の質量に圧倒され[る]」(雨宮処凛,p.268)といったように、Kの孤独が若者世代に共感的に理解されるのも、そうした若者世代の意識によるものであろう。なお、Kについて語られることによって、結果としてKは悪名を残すにしても少なからぬ共感的な理解も受けて社会的な記憶に残るが、その一方で不条理に命を奪われた被害者たちは無名のままに終わる。恐らくその一人一人に、Kと同じく詳細に語られるような様々な思いと人生の歩みがあったのであり、亡くなった被害者と親しかった人々が矛盾を感じるのは当然である。記しても矛盾は解消しないのであるが、共感的理解による同情にも忘れてはならない限界があることを付け加えておきたい。
- (注57) ただし、彼にとって重要な人間関係であった高校時代の友人は、連絡を断った後も気にかけていたおり、公判では「最も親しい友人という存在です。(自分が)掲示板にのめり込んだことで存在を小さく見ていたことを申し訳なく思います」と述べている。(第18回公判)
- (注58) Kには「おとなしい」「まじめ」という周囲の評価があるが、そのように見られているであろうことをK自身が認識していて、「演じている自分」という見方をしている。
- (注59) 唯一の例外は、職場で親しくなり彼が唯一人心を離れた先輩社員に、青森出奔につながったネット仲間との会合計画(恋人募集が主目的であった)を打ち明けたことである。しかし、この時も当然の忠告を彼は受入れることはなかった(中島pp.115-116)。
- (注60) こうした独断的な態度は、Kのような青年世代に特有の傾向ではない。相手の言うことを聞かずに自分の主張だけを声高に話す討論者、一方的に決め付けて暴言を浴びせるクレマー、自己を無謬とし高見からの論評に終始する論断・マスコミ等々、——こうしたことはレベルを問わなければ本質的に同様の現象である。
- (注61) 見田宗介,「『空気』の薄い時代」『朝日新聞』2008-12-31
- (注62) Kは、わずか25歳(!)で恋人不在に焦ったが、それは若者として決して例外ではない。
- (注63) ただし、故郷青森における友人との関係は、青森出奔がなければよき「友人関係」でありえたように思われる。
- (注64) 盛岡市が補助を出している盛岡劇場などの演劇活動など、大都市に見られる文化活動の支援は青年層の交流活動の機会としても、きわめて有意義である。
- (注65) Kの職場の人間関係は特に事件との関連で特に問題とするような点はなかったが、派遣労働問題としても改善が望まれるのは、職場における派遣—正規の「身分格差」と交流の欠如である。
- (注66) Kの犯行は現代社会の構造による人間関係の希薄さが一因であり、そうした問題を克服するには「強い市民社会と居場所づくり」が必要という主張は、本稿の視点からも重要な指摘である。「社会に向けて発言ができたり、ただその場にいるだけでもお互いが尊重される安心感・信頼感を感じられる空間」が”居場所”であり、それは人と人の「つながり」を意味する(湯浅 誠・河添 誠,p.178)。



## <文献>

- \* 2008のみ刊行日を記載。末尾に\*のあるものは秋葉原事件に内容の一部で触れているもの。
- 湯浅 誠・河添 誠, 2008, 「希望は、連帯」(対談); 湯浅 誠・河添 誠(編), 2008, 『「生きづらさ」の臨界——“溜め”のある社会へ』, 旬報社, 4 (章) (08/07/20\*)
- 大塚英志・東 浩紀, 2008, 「終章 二〇〇八年——秋葉原事件のあとで」;  
『リアルのゆくえ——おたく／オタクはどう生きるか』, 講談社現代新書) (08/08/06\*)
- 佐藤 優・雨宮処凛, 2008, 「秋葉原事件を生んだ時代」, 『中央公論』2008-8
- 洋泉社ムック編集部, 2008, 『アキバ通り魔事件をどう読むか!?!』, 洋泉社MOOK (08/08/29)
- 碓井真史, 2008, 『誰でもいいから殺したかった!』, KKベストセラーズ (08/09/20)
- 大澤真幸(編), 2008, 『アキハバラ発——<00年代>への問い』, 岩波書店 (08/09/26)
- 矢幡 洋, 2008, 『無差別殺人と妄想性パーソナリティ障害——現代日本の病理に迫る』,  
彩流社 (08/09/30\*)
- 文春新書編集部, 2008, 『論争 若者論』, 文春新書 (08/10/20\*「第三部」)
- 芹沢俊介, 2008, 『若者はなぜ殺すのか——アキハバラ事件が語るもの』, 小学館101新書 (08/11)
- 和田秀樹, 2008, 『感情暴走社会——「心のムラ」と上手につきあう』, 祥伝社新書(まえばき08/08/05\*)
- 尾木直樹, 2008, 『「よい子」が人を殺す——なぜ「家庭内殺人」「無差別殺人」が続発するのか』,  
青灯社 (2008/08/30)
- 香山リカ, 2008, 『私は若者が嫌いだ!』, ベスト新書(08/12/20)
- 雨宮処凛, 2009, 「あとがき」, 『プレカリアートの憂鬱』, 講談社pp. 261-272 (08/11)
- 赤木智浩, 2009, 『「当たり前」をひっぱたく——過ちを見過ごさないために』, 河出書房新社 (第3章)
- 糸圭秀美・芹沢一也・荻上チキ(鼎談), 「青年<糸圭>秀美の1964年」;  
芹沢一也, 2009, 『革命待望——1968年がくれる未来』, ポプラ社
- 片田珠美, 2009, 『無差別殺人事件の精神分析』, 新潮選書
- 岡田尊司, 2009, 『アベンジャー型犯罪——秋葉原事件は警告する』, 文春新書
- 影山任佐, 2009, 『誰でもよかった——無差別殺傷になぜ走る; 希薄な人間関係にもがく「青少年たち」』,  
ごま書房新社
- 長谷川博一, 2010, 「私は小さな頃から「いい子」を演じてきました; 秋葉原無差別殺傷事件 加藤智大」  
(『殺人者はいかに誕生したか——「十大凶悪事件」を獄中対話で読み解く』, 8章, 新潮社)
- 元田興一, 2010, 『ぼくらは現代社会でゼロ化する——かぎりなく個人が消えてゆく』, 双文社出版
- 仲正昌樹, 2010, 『<リア充>幻想——真実があるということの思い込み』, 明月堂書店
- 片田珠美, 2010, 『一億総ガキ社会——「成熟拒否」という病』, 光文社新書
- 中島岳志, 2011, 『秋葉原事件——加藤智大の軌跡』, 朝日新聞社

(秋葉原事件には触れていない文献)

- 雨宮処凛・萱野稔人, 2008, 『「生きづらさ」について——貧困、アイデンティティ、ナショナリズム』,  
光文社新書
- 後藤和智, 2008, 『おまえが若者を語るな!』, 角川ONEテ-マ21
- 横井修一, 2009, 「ジメルとフロムにおける「交流」の思想——ジメル「社交性」論からの示唆」,  
『ジメル研究会会報』2009; 発表報告2008-09-06)

## <資料>

- AERA, 1997, 「神戸惨殺14歳の闇」『AERA』1997-7-14
- AERA編集部, 2008, 「アキバの「彼女」と借金」『AERA』2008-6-23
- 週刊新潮, 2008, 「特集・ネットで「神」と崇められる「アキバ通り魔」」『週刊新潮』2008-6-26
- 週刊朝日特集, 2008, 「「若者」に気をつけろ!」『週刊朝日』2008-6-27
- <http://sankei.jp.msn.com/> <MNS産経ニュース「秋葉原17人殺傷事件」>
- <http://www.kotono8.com/wiki/> <関ペディア「秋葉原事件」>
- (既発表) 「若者の“希望格差”を考える——“無差別殺傷事件”の背後にある若者意識」  
(福島大学行政社会学部特別講義: 2008/10/24)